

戦地に送られた終戦直後の葉書

——ラファイエット大学スキルマン図書館所蔵資料より——

折原里枝

はじめに

昭和館では、毎年海外資料調査を実施し、戦時中や戦後の占領期に撮影された写真や映像などの入手を進めている。平成二十六年（二〇一四）度の調査は、その準備段階で、占領期の日本各地を撮影した写真“Gerald & Rella Warner Japan Slide Collection”^①を所蔵しているという情報を得て、アメリカ合衆国ペンシルベニア州のラファイエット大学スキルマン図書館 (Lafayette college Skillman Library) を調査し、貴重な写真約五六〇枚を確認することができた^②。さらに、日本語で書かれた郵便葉書を多数所蔵していることも新たに確認した。それが“East Asia Image Collection, Pacific War Postcard Collection”^③である。

郵便葉書は、占領期にGHQ（連合国総司令部）が検閲済を意味するスタンプを押した葉書であることが分かった。その葉書を読み進めていくと、終戦後間もない当時の日本人びとの生活の様子や、出征した夫や父親の復員を待ちわびる家族の心情が書き記されていた。

本稿で取り上げる郵便葉書は、日本各地の家族や友人、知人が主に南

方のフィリピンに配属された部隊にいる出征兵士に宛てたものである。これらの葉書は、兵士が戦死したり、すでに復員の途路にあったために受け取ることができなかったか、何らかの理由で本人の手元に渡らず、本来処分されていたかもしれない葉書である。その意味でも大変貴重であるが、これまでこうした資料が検討されることは少なく、したがって研究も多くないのが実情である。

本稿は、四〇〇枚以上に及ぶ葉書を通して、戦後に行なわれたGHQによる郵便検閲や外国への郵便事情を明らかにするとともに、兵士の帰国を待つ家族らの気持ちを読み取ろうとするものである^④。

一 アメリカに渡った占領期の葉書

1、ラファイエット大学所蔵の郵便葉書の概要

ラファイエット大学が葉書を所蔵するに至った経緯については、同大学の学生であったBrett Doyle（ブレット・ドイル）氏が平成二十三年（二〇一一）に、同大学のPaul Barclay（ポール・バークレー）教授にEメールを送ったことがきっかけで、翌二十四年にBrett Doyle氏の父親であ

る Daniel Doyle (ダニエル・ドイル) 氏から同大学へ寄贈された。葉書は Daniel Doyle 氏が自宅の屋根裏を片付けていたときに偶然見つけたもので、日本語で書かれた古い葉書は袋に入っていたという。なぜ、このような葉書が自宅にあるのか、どこからきたものなのか、その経緯については全く不明であるという。四〇〇枚を超える葉書が、宛名の人に届くことなく、アメリカの個人宅の屋根裏部屋で約七十年間過ごし、静かに私たちの目に触れる機会を待っていたのである。

2、GHQによる郵便検閲と葉書に押された検閲印

ラファイエット大学所蔵の四一四枚の葉書には、白紙のものが一枚含まれており、意志をもって書かれた葉書は四一三枚である。このうち、GHQの検閲印が押された葉書は四〇六枚にのぼる。

昭和二十年(一九四五)八月十五日の終戦後、「日本を占領下においたGHQは、日本の非軍事化と民主主義の定着を占領政策に取り入れていた反面、占領支配を維持するために、国民が触れる映画・演劇・放送・新聞・雑誌・書籍から電話・電報・郵便・幻灯・レコード・紙芝居に至るまで統制と検閲を行っていた」⁽⁵⁾。

占領軍による郵便検閲は、同年十月一日に発せられた「郵便の検閲に関する総司令部覚書(AG311.7)」⁽⁶⁾を受けて、日本政府は十月十二日に次のように法的整備を行なった。⁽⁷⁾

閣令第四十三号 昭和二十年勅令第五百四十二号ニ基キ連合占

領軍ノ為ス郵便物、電報及電話通話ノ検閲ニ関シ左ノ通り定ム

昭和二十年十月十二日 内閣総理大臣 幣原喜重郎

内閣総理大臣ハ連合軍最高司令官ノ要求ニ依リ連合占領軍ノ為ス郵便物、電報及電話通話ノ検閲ニ協力スル為当該官吏ヲシテ当該協力ニ必要ナル行為ヲ為サシムルコトヲ得

十月十一日付の朝日新聞には「郵便等に検閲制 連合軍の命である閣令公布」の見出しで、「戦時中施行された信書に対する検閲は終戦間もなく去る八月二十日廃止されたが、このほど連合軍最高司令官の命により再び検閲が郵便物、電報及び電話通話に対し行はれることとなり、わが政府に対しその協力を指令して来た、政府は十日の閣議でこれに必要な閣令案を決定し、通信院で連合国検閲当局の要求に従って通信検閲について協力することゝなつた 検閲に付せられる通信は主として国際通信だが内国通信も必要に応じ随時検閲されることになつている なほ閣令は十二日付で公布される予定である」⁽⁸⁾という記事が掲載された。

検閲を担当したのは、参謀第二部(G-2)に属する民間検閲支隊(Civil Censorship Detachment = CCD)で、昭和二十年十月十六日から昭和二十四年十月まで行なわれることになる。⁽⁹⁾

裏田稔氏によると、郵便検閲は「東京、大阪、福岡の各地方検閲部と名古屋分局(昭和二十三年まで)行われ、北海道・東北・関東などは東京地方検閲部、近畿や四国などは大阪地方検閲部、というように受持分担地域が決まっていた」⁽¹⁰⁾という。検閲された郵便物には宛名面に検閲印が押印された。それは、上部が波を打った金魚鉢のようなデザインで、アルファベットの「P」と「C」の文字を組み合わせた記号が中央部に位置し、上部に「C.C.D.」または「C.C.D.J」と表記がされている。四〇六枚の葉書のうち、四〇二枚は、宛名面にその検閲印が押されている。〔資



資料1 「C.C.D.J-3」と正位置で押印された検閲印。番号は「3」。昭和21年1月8日 東京都の消印が押されている。

料1」

検閲印について、森勝太郎氏が「金魚鉢のような輪郭の中の円の中心に『POST CENSOR』(郵便検閲官)の頭文字の『P』と『C』を重ねたものである。その上の『C.C.D.』は『Civil Censorship Detachment』(民間検閲部)の略で、続く番号は検閲官の固有番号である。番号の前に『J』のついたものは『Japanese』つまり日本人の検閲官が使用したもので、単に『C.C.D.』とあるものは連合国人の検閲官の使用したものである」と述べている。

「P」と「C」については、「Censorship Passed」(検閲済み)や「Passed by Censor」(検閲官通過)という解釈もなされてくるようである。

森氏は検閲印の押し方によって、どこかの検閲部で行なわれたものか見分けることができるとし、「郵便物の検閲は、東京、大阪、福岡の各地方

検閲部と名古屋分局の四カ所で行われたが、検閲印の押し方とその日付の書き方で、検閲された場所を判定することができる。(中略)葉書の場合には正位置において検閲印を見たとき、各検閲地別の特徴は次の通りである」と述べ、それぞれの検閲局の押し方と日付記入方法による検閲地の判別を画像で紹介している。その内容は、東京は検閲印が逆さまで日付は「月・日」の順、大阪は正位置で押し、日付は「日・月」、福岡は逆さまで、日付の順序は「日・月」、名古屋は正位置で日付は「月・日」の順になっているという。

「C.C.D.」または「C.C.D.J.」に続く番号については、「検閲官各自の固有番号であるため、その番号によって、どこで検閲されたかが、だいたいの判明することができる」とし、検閲官番号による検閲地の判定表を示している。

以上のことを鑑みて、検閲印が押しされた四〇六枚の葉書を確認すると、まず、「C.C.D.」のスタンプが押しされたものは二三四枚、「C.C.D.J.」のスタンプは一三五枚あり、判読不能なものが三六枚となる。例外で一枚だけ「C.C.D.J」と「C.C.D.J.」の二つのスタンプが、それぞれ黒と紫の異なるインクで押されており(口絵4・資料2)、二度にわたって検閲を受けたことが分かる。その葉書は、差出人の居所が「朝鮮」であったことが二つ検閲印を必要としたのかもしれない。

ラファイエット大学所蔵の葉書に押しされた検閲印にはすべて日付の記載はなく、検閲印の向きは正常、逆さま、左右横を向いたものときまぎまぎである。検閲印の向きは、正位置は、一七七枚、逆さまが一九五枚、横向きが三三枚であった(二つ押しされた葉書は含まない。傾いて押しされている場合は、より近い方を採用した)。

表1 差出元の都道府県別枚数

都道府県名	葉書枚数	都道府県名	葉書枚数
北海道	5	大阪府	8
青森県	0	兵庫県	22
岩手県	5	奈良県	7
宮城県	3	和歌山県	4
秋田県	5	鳥取県	4
山形県	6	島根県	13
福島県	14	岡山県	11
茨城県	3	広島県	7
栃木県	1	山口県	4
群馬県	10	徳島県	2
埼玉県	11	香川県	4
千葉県	16	愛媛県	1
東京都	65	高知県	1
神奈川県	12	福岡県	23
新潟県	16	佐賀県	9
山梨県	7	長崎県	5
長野県	1	熊本県	6
富山県	2	大分県	4
石川県	1	宮崎県	1
福井県	7	鹿児島県	2
岐阜県	12	沖縄県	0
静岡県	11	朝鮮	1
愛知県	12	満州	1
三重県	12	中支	1
滋賀県	11	不明	1
京都府	23	計	413



資料2 検閲印が2つ押された朝鮮から差し出された葉書

森氏は「検閲印に記入された日付は、検閲開始当初は、ただ検閲印が捺印されるだけで日付は記入されなかった（ただし、押捺の正逆の区別は最初から行われている）」⁽¹⁶⁾としているが、占領が始まって間もない時期のため、日付はなかったであろう。

また、検閲印の数字については、不明瞭なものが多いものの、若い番号では、一桁の「3」という番号が押されているものから、三桁の九百番台の数字まで読み取ることができる。森氏が示した検閲官番号による判定表⁽¹⁷⁾では六千番台であるところを見ると、四〇六枚の葉書に見られる検閲印の番号はかなり若い番号である。また「この番号は検閲官の固有番号であって、もし番号の名簿を見ることができたとすれば、この番号によってだが検閲したかわかるわけである。また、検閲官各自の固有番号であるため、その番号によって、どこで検閲されたかが、だいたいの判明することができる」⁽¹⁸⁾としたが、森氏が示した判定表で若い番号のものは、資料が不足しており、不確定な点が多いともされている。

四一三枚の葉書が差し出された地域については、青森県と沖縄県を除き、全国各地に及んでいる（表1）。最も多いのは東京都の六五枚、次いで京都府と福岡県の二三枚と続く。差出地が東京都の葉書に押された検閲印は、正位置が四六枚、逆さまが八枚、横が九枚、印なしが二枚であった。東京から同日に差し出された葉書は、同じ東京の検閲部で検閲されたと推測できることから、葉書を確認すると（資料3）、押捺の位置で規則性を見出すことは難しいようである。

検閲印のみられる四〇六枚のうち、逆さまに押された検閲印は正位置より多い一九五枚にのぼり、一桁の「4」という若い番号から三桁の数字までを確認できる。横向きを検閲印三三枚は、「27」「430」という同一



資料3 とともに差出元は東京都、昭和20年11月17日消印の葉書。



資料4 検閲番号「27」で左右向きが異なる検閲印。ともに差出元は東京都、昭和20年11月17日消印の葉書。

の検閲番号が押印されている。そのなかで最も多かった「27」と読み取れる検閲番号については一八枚確認することができた。「27」の検閲番号は、さまざまな位置でみられ〔資料4〕、北は福島県から南は島根県と十二都府県と幅広い地域から差し出された葉書であった。「27」番の検閲印が押された葉書は大半が昭和二十年十一月十六日と翌十七日の消印が押されていることは特筆すべき点であろう。「昭和二十年十一月十六日」は、復員郵便が開始された日である。

占領が始まって間もない時期に書かれたこの葉書は、検閲郵便の初期段階のものであることを考えると、整備される以前の貴重な検閲資料といえるだろう。

3、葉書が書かれた時期

四一三枚の葉書が書かれた時期については、差出人による記述と消印から多くを確認することができた。昭和二十年六月から翌二十一年一月までの約八か月間という限られた期間に書かれた葉書であると推測でき、そのほとんどが戦後に書かれた葉書である。文中に「昭和二十一年九月二十八日」と記されたものが一枚あり、消印は不明瞭であるが、五銭切手が貼られている。郵便料金は、昭和二十年四月一日の改定で、国内郵便・占領地宛郵便・軍事郵便・日満郵便・日華郵便の通常郵便料として、第二種の通常葉書は五銭¹⁹であった。昭和二十一年七月二十五日の料金改定で外国に宛てた郵便料金が十五銭とされたが、それ以前の料金、五銭切手が貼付されていることから、昭和二十年の誤りかもしれない。

最も早い時期の葉書は終戦前に書かれた軍事郵便で、「昭和二十年六月二十二日」の消印が押されている。

福岡県福岡市郵便局気附 暁部隊第一九八三八部隊 浜田克三様

差出人…三重県 浜中 消印…昭和二十年六月二十二日 (知人)

「拝啓 時下 初夏の候に相成候 其後は意外の御無信 平に御海容被下度 其許様には益々元氣にて御奮励の趣き 一昨日御書面来着 拝承致 何より結構と喜んで居ります 当方も御蔭様に皆々異状なく 夫れく業務に活動致し居ります 御安心下さい 併しなから時局は倍々重大性を加ふる計り何時も由断(マヤ)のならぬ危機に相迫り候折柄 第一健康であり自愛して 国家の為め倍々奮闘責務完遂せらるゝ様 蔭ながら念願致し居ります 尚貴家皆々も無事です 御安心下さい 先は粗雑ながら右迄如此に御座候 早々 (6.21)」

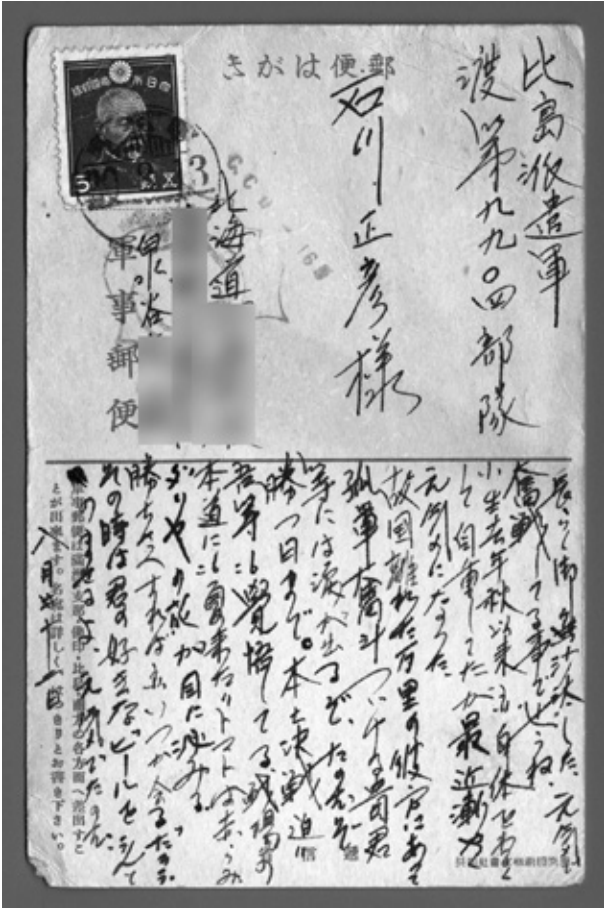
「軍事郵便」は、戦時中に出征した兵士と家族や知人が互いに交わした郵便のことで、軍の検閲を経て相手に送られた。これは、互いの近況を伝える数少ない手段であった。葉書では「時局は倍々重大性を加ふる計り何時も由(油)断(マヤ)のならぬ危機に相迫り候折柄」と、緊迫した時局を伝えている。

終戦間際に書かれた葉書としては、昭和二十年「八月十二日」に書かれた葉書がある。〔資料5〕

比島派遣軍 渡第九九〇四部隊 石川正彦様

差出人…北海道 泉谷 消印…昭和二十年八月十三日 (知人)

「長らく御無沙汰した。元氣で奮戦してる事でせうね。小生去年秋以来亦身体をわるくして自重してたが 最近漸やく元氣になった。故



「たのむぞ勝つ日まで」「勝ちさへすれば」という平時でない状況と、赤く実ったトマトとダリアの花は、戦時の時でも変わらずに実り、咲いている様子が物悲しい。「ビール」といった贅沢品に触れ、勝利による再会を望んでいるようだ。

戦時中に書かれた、あるいは消印から判断できるその他の軍事郵便は

国離れた万里の彼方にあつて孤軍奮闘つゞける貴君等には涙が出るぞ、たのむぞ勝つ日まで。本土決戦迫り 吾等も覚悟してる。戦場の本道にも夏来たりトマトは赤らみ、ダリアの花が目に沁みる。勝ちさへすれば亦いつか会えるだろう その時は君の好きなビールをうんとませるよ、元気でたのむ。八月十二日



資料5 終戦3日前に書かれた葉書。宛名面では「C.C.D.」という印字が読み取れる。裏面は国民学校4年生の原画を用いた絵葉書。

計七枚あり、先に紹介した六月に差し出された葉書が一枚、七月に三枚、終戦前の八月に一枚、時期は不明だが内容から判断して終戦前と思われる葉書が二枚ある。この二枚の差出元は「満州」と「中支」（共に現在の中国）で、陸軍恤兵部と陸軍軍需品本廠発行の葉書が使用されている。赤字スタンプで「検閲済」とあり、旧日本軍による検閲が行なわれたこと

とを示している。戦時中、国内から発送される軍事郵便は各交換局に集められ、その後、軍用船などで運ばれ、現地の野戦郵便局に届けられた。この七枚すべてにGHQの検閲印が押されていることから、宛先の戦地に送られることなく、終戦を迎えた国内でGHQの検閲を受けたものと思われる。

戦後いち早く出された葉書は、昭和二十年「八月十八日」に書かれたものである。

比島派遣 垣一五五部隊 山下隊 村上奉三様

差出人：京都府 なし 消印：昭和二十年八月十九日（息子から父親へ）

「とうちゃんお元気ですか、僕はたいへん元気で毎日をかんばんつてをります御安心下さい 京都もだいぶんにあつくなりました そちらの方もだいぶんにあついでせう、そちらの方（ママ）の方が京都よりもづつとあついでせう 家中おばあちゃんもおかちゃんも皆んなたいへん元気です。勝美も元気で、あはれていますから 八月十八（ママ）」

この葉書は、息子から父親に宛てた葉書で、終戦の三日後に書かれ、消印は翌十九日である。

終戦を伝える葉書としては、九月一日に書かれたものが最も早い。

比島派遣 威一八二〇〇部隊ノ一 谷川昇殿

差出人：兵庫県 谷川 消印：昭和二十年九月三日（家族）

「爆弾焼夷弾と随分やられ市街は一変しましたが吾等何等の被害も無

く一同無事に活躍して居ります 八月十五日突如日本はポツダム宣言を受諾する事になり戦争は終わりました 之に対し血気の若者が奮起する気配もありましたが 之れこそ将来の日本の前途を誤るものと反省し鎮静しました 唯今後は一致団結苦難の日本を背負って厚生するより外は無いです 然らば前途は自然に開拓出来ると思えます 健在を祈ります（九月一日）」

「爆弾焼夷弾と随分やられ市街は一変しました」とあるのは、差出人の住所が神戸であることから、昭和二十年三月の空襲被害のことであろう。街の様子とともに、戦争が終わったことを伝えている。

二 比島に送られた葉書と戦後の郵便事情

1、復員郵便の開始と新聞の報道

終戦後、外国郵便は停止され、海外に残留する旧日本軍人、軍属、その他の日本人に宛てた郵便が連合国総司令部の承認を得て、昭和二十年十一月十六日から取り扱われることになった⁽²¹⁾。これらの郵便は「復員郵便」と呼ばれる。

同日の朝日新聞に次のような記事が掲載された⁽²²⁾。

「在外邦人への便り」（見出し）

遠く海外で帰国の日を持つ日本将兵および一般在留邦人に対する通信について、通信院では差出条件をマツカーサー司令部と交渉の結果承認を得たので、つぎの範囲でたゞちに家郷の便りが送れること

表2 葉書がしたためられた、または投函された時期

昭和20年(戦前)		2
昭和20年 6月		1
昭和20年 7月		3
昭和20年 8月	1日～15日	1
	16日～31日	1
昭和20年 9月		20
昭和20年10月		31
昭和20年11月	1日～15日	7
	16日～30日	184
昭和20年12月		108
昭和21年 1月		35
(戦後)		15
不明		5
計		413

になった、通信には復員船が使はれるが、返信については将兵からのものではできるだけ帰途を利用し、一般邦人からのものも現地郵政の許される範囲で運ばれるはずである、軍事郵便は満洲を除き従来取扱はれた全地域に出せるが、一般邦人宛のものは三十八度以南の朝鮮、台湾、南洋委任統治領、小笠原諸島および西南諸島等の日本附属島嶼、中国、香港、マライ、スマトラ、ボルネオ、ジャワセレス、ビルマ、フィリピン諸島、印度支那、シヤムに限られ、北鮮、樺太、関東州、満洲宛のものは当分取扱はれない

通信内容は安否の消息、その他個人的性質のものに限られ、商業、金融に関する通信は一切禁止、種類も葉書に限られ、書留等の特殊取扱ひはできない、料金は外地、中国宛のものと軍事郵便は内地と同じ五銭だがその他の地域宛は十五銭、軍事郵便の名宛は従来通りだが南方在留邦人宛のものは住所氏名をローマ字で附記することな

ほ郵便物はすべて米軍当局が検閲する

読売報知新聞「送ろう懐かしい故国の便り 外地、南方向け郵便物許可」⁽²³⁾、毎日新聞「在外将兵邦人へ便りが出来ませす」⁽²⁴⁾との見出しで同様の内容が掲載され、国外にいる家族や知人と連絡が取れることになった。ただ、北鮮、樺太、関東州、満洲宛のものは依然として取り扱われなかった。ここでの郵便は葉書に限定され、内容も安否の消息などに限られ、商業や金融に関するものは禁止された。

十一月十六日から復員郵便が開始され、直接安否をたずねることができようになったことで、ラファイエット大学所蔵の葉書も昭和二十年十一月と十二月の日付のものが際立って多くなっている。四一三枚の葉書のうち、十一月は一九一枚、十二月は一〇八枚で全体の約七〇%を占めることになった(表2)。十一月に差し出された一九一枚のうち、復員郵便が開始された十六日に書かれた葉書は二四枚、翌十七日が三四枚あり、新聞記事を読んだ家族が早々に葉書をしたためたことがうかがえる。なお、昭和二十一年九月十日に外国郵便が再開されたことで、「復員郵便」は廃止された。

次の葉書は、復員郵便が開始された初日に差し出されたものである。

比島派遣軍 豹第一二〇二三部隊 炭谷隊 炭谷鷹義大佐殿

差出人…東京都 川本 消印…昭和二十年十一月十六日(知人)

「拝啓 暫く無音に打過ぎ失礼致し候 お便り致さんと存じ居り候も

何分御承知の通りの状態にて 心ならずも失礼致し候 今朝の新

聞紙で便りし得ると知り 早速執筆致し候 此の消息が無事にお手

許に到着する様祈りつゝ書き居り候 先づ第一に一同親族皆無事元気に候間 此の点御放念被下度候 平壤の家族は去る五月に引き揚げ 目下 奥村裕三氏の家(埼玉県北足立郡)に皆元気で暮し居り候 御安神を願ひ候 武も大きく相成り候 誠も元氣、忠も相変らず 姉も和子、昭子も皆大元氣 美子は笠原工学士の嫁となり浦和にあり 幸福に暮し居り候。荻窪の兄の一家も無事、小生の宅も戦災を免れ研究所も無事、清水、野村は戦災にて家屋は焼失致し候も 人員は無事に候 元気で帰還を待ち居り候 上京したら鷺宮の小宅へ来られ度候 敬具(昭和廿年十一月十六日)」

(傍線部は筆者、以下同)

「今朝の新聞紙で便りし得ると知り 早速執筆致し候 此の消息が無事にお手許に到着する様祈りつゝ書き居り候」と新聞記事を読んでさつそく葉書をしたためたことと、家族の安否と近況が綴られている。

次の二通は、新聞で情報を得た妻から夫へ差し出された葉書である。

比島派遣 鉄第五四四八部隊 岩崎隊 立石正広様

差出人…岡山県 立石 消印…昭和二十年十一月十八日(妻から夫へ)

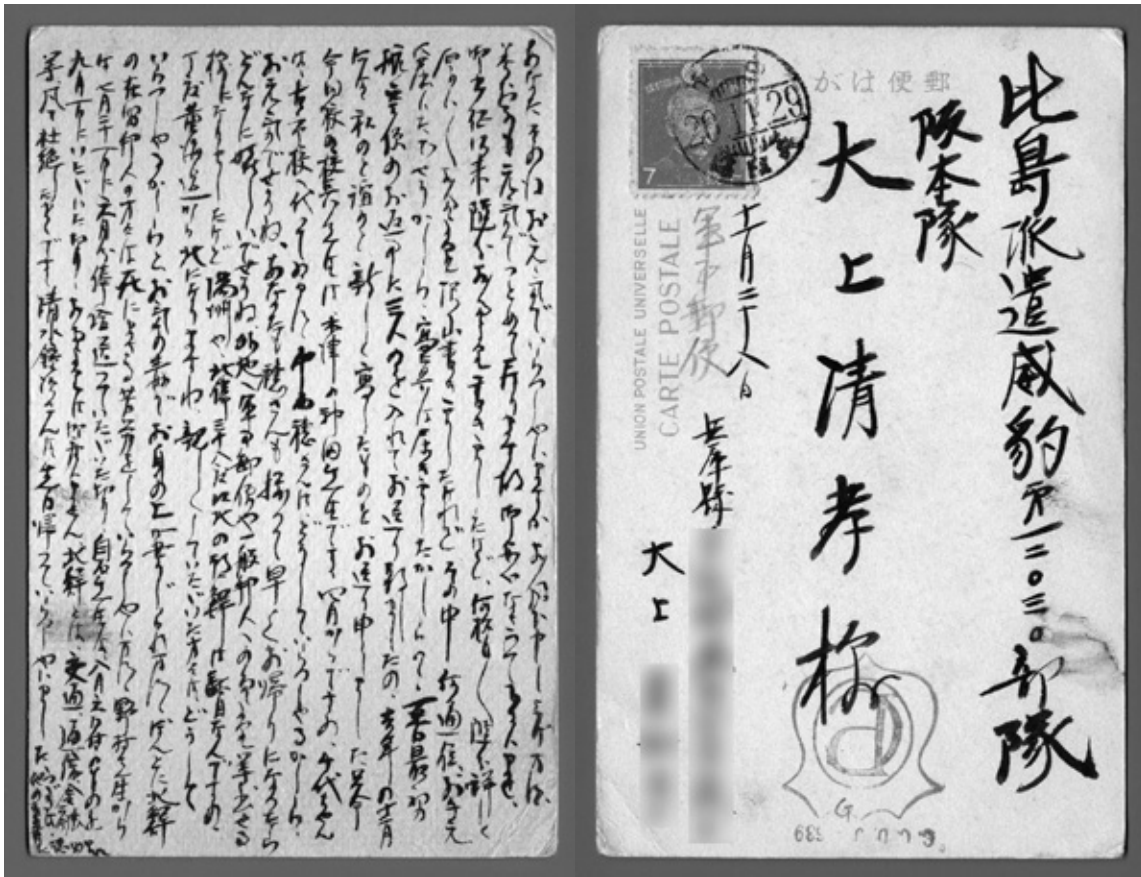
「悪筆にて御免下さいませ 其の後お久敷く音信絶へて仕舞つて現在に御安否如何と家中中案じ暮してゐました矢先 丁度昨日の新聞紙上にて文通可能とありまして早速筆を取りました始末 御赦し下さいませ 御地は常夏の国の事とて十一月も下旬の今日でも美しき花は乱満として今尚新緑の蔭なつかしき頃と存じます この炎天下酷暑に打勝つてお元氣に御送日遊ばされますでせうか?…… それの

み御案じ申上げて居ります…… 降りまして此方家の者父母上様をはじめ 私も至極達者日々食糧増産に益々奮闘して居ます 今のは内地は丁度稲の収穫麦蒔きと目のまはる忙がしきでございます 此の農繁期御年老の父母上様とても張り切つて頑張つて下さります程に決して決して家の事は御心配下さいませ 大丈夫でございます 異郷の地ではきつと郷里の事御心配遊ばしてゐらつしやいます事と存じますけど今日の日迄家に何等の□もなく明るい楽しい毎日を過して参りました 只一ツ気にかゝるものは貴方の御身のみでございます どうぞ一日も早く家族の仲に加へられる様…… 一同はるか母国の一隅より御健康とあはせて 其の日の早からん事お祈り申上げて居ります かしこ (拾壹月十八日)」

比島派遣 威豹第一二〇三〇部隊 阪本隊 大上清孝様

差出人…兵庫県 大上 消印…昭和二十年十一月二十九日(妻から夫へ)

「あなたその後お元氣でいらつしやいますか お伺ひ申し上げます。美知子も元氣でつとめて居ります故 御安心なさつて下さいませ。御出征以来随分おたより書きましたけど、何枚もくゝ随分詳しく厚いくゝおたより沢山書きましたけれど、その中、何通位お手元に届いたでせうかしら。写真は届きましたかしら? □□最初の航空便のお返事に三人のを入れてお送り致しましたの。去年の十二月には私のと誼のと新しく写したものをお送り申しました 只今今田校の校長先生は木津の神田先生です。四月からですの。千代ちゃん、古市校へ代つてゐます 中西稔さんはどうしていらつしやるかしら、



資料6 妻から夫に宛てた葉書。検閲印は「C.C.D.J-639」とみえる。

お元気でせうね。あなたも捻さんも揃って早くお帰りになつたらどんなに嬉しいでせうね。外地へ軍事郵便や一般邦人へのたより等出せる様になりましたけど、満洲や北緯三十八度以北の朝鮮は駄目なんです。丁度黄海海辺から北になりますね。親しくしていた方々はどうしていらつしやるかしらと、お気の毒でお身の上が案じられます。ほんとに北鮮の在留邦人の方々は死にまざる苦勞をしていらつしやいます。野村先生からは七月二十一日に六月分俸給送つていたゞいた切り、白石先生は八月六日付のものを九月一日にいたゞいた切り、おたよりは御座いません。北鮮とは交通、通信、金融等、凡て杜絶したまゝです。清水鐘次さんは先日帰つていらつしやいました。つゞきは他の葉書に認めます（十一月二十八日）〔資料6〕

郵便葉書が送達できるようになつたことは、新聞だけでなく、ラジオでもアナウンスされたことが書かれています。

比島派遣軍ミンダナオ島 豹第一二〇二五部隊 三上部隊 植田隊

植田猛様

差出人・福島県 山平 消印・昭和二十年十一月十七日（知人）

「前略 異国ノ空ニ永ノ年月御苦勞様デアリマス、今日十一月十六日朝ノラジオ比島トノ通信許可ノ放送、雀躍前後ヲ忘レ本書認メ候先ツ植田猛様御無事デアリマスカ。隊員ハ如何デアリマス、原利喜助様、其ノ他前田寿一、坂本玉城、金城健夫、宮下文人、岩脇義一、峠秀雄以上各位御変リアリマセンカ、義郷が色々ト御世話ニ相成御礼申上ゲマス、義郷ハ生存シテ居リマスカ、私方モ一同無事デス

ガ家財ハ戦災焼失デス、何月頃帰還デスカ 御差支ナキ限り御一報願ヒマス、敗戦内地モ食糧ニ困ツテ居リマスガ 駐屯米軍ノ兵隊サンモ同情深ク 且ツ優シク子供等ニ菓子ナド与ヘラレ 次第二明ルクナツテ居リマス、英語勉強ガ次第二増シテ居リマス(20・11・16)

比島派遣 威一〇六九三部隊 林田隊 藤田明彦様

差出人・千葉県 藤田 消印・昭和二十年十一月十七日(家族)

「明彦 随分長いことお便りありませんでしたね 又こちらからも御無沙汰いたして居りましたが、其後如何御無事でせうね 戦争中は申までもなく 終戦の今日比頃は明けても暮れても思ひは比島のお身の事ばかり心にかゝつてなりません でも時節のくる迄はどうにもなりません 只ひたすら神仏の御加護を祈念いたし 一日も早く復員になります様 一日千秋の思ひで待ちわびて居ります 家でも皆無事に暮して居りますから御安心下さい 幸当地は空襲にも何等の被害もなく 皆元気で増産にはげんで居ります 本朝ラヂオの報道で比島スマトラへの通信が出来るとのことをききましたので 取りあへずこの便りを書きました どうぞ御自愛專一になさる無事お帰りになられる様祈つて居ります では さようなら

(20・11・15)

このように国内にいた家族にとって、出征した家族、知人らの様子も少しでも知ろうとするその情報はまず新聞とラジオであった。

さらに、これらの報道は家族にとって、兵士の帰還を待つうえでも重要な情報を得る場であった。

比島派遣 威約一二〇三〇部隊 後藤隊 落合秀夫様

差出人・佐賀県 落合 消印・昭和二十年十二月三十日(妻から夫へ)
「御主人様御変りはございませぬか。終戦後三ヶ月あまり 一日として、案じない日はございませぬのに、今までおたよりが出せず 毎日〳〵新聞ばかりよんでおりました。やつと、便りが出せるやうになりました 戦争はすんでも病気でたをれる人が多いとか新聞でよみました。どうぞ御無理をなさらず 一日も早く 御かへりになる日を待つております 克己が病気で、岸山の方に来ております、克己もすつかり元気になりました」

終戦後、出征した夫の体を案じ、新聞ばかりを読んでいたといい、戦争が終わっても病気で倒れる兵士が多いことを知り、夫の体を心配して、便りを出したのであった。また、ラジオや新聞は復員船が日本に帰港する情報も伝えていた。

比島派遣 威第一二一〇〇部隊 千葉隊 西村他家養様

差出人・東京都 西村 消印・昭和二十年十一月十七日(妻から夫へ)
「其後御元氣にお暮しの御事と存じます。家でも御暮様にて皆不事に過して居ります。そちらの気候はいかがですか 東京は朝夕めつきり寒く成りました でも昨年よりは暖かい様です。毎日〳〵ラジオや新聞の比島よりの引揚船の入港するのを見て 一日千秋の思ひで待つて居ります。弘子も此頃とても丈夫に成りました。清水さんや原木さんも御元氣ですか。大崎の家では福島へ疎開なさいました。

皆元気です。矢口でも戦災いたし 今焼あとにバラックを建て、居ります。大井と八王子と峯と家だけのこりました。では又、御便りを御待ちして居ります。呉くも御身御大切に かしこ(十一月十七日)

毎日伝えられる情報を得ようと「一日千秋の思い」で夫の復員を待つ想いを伝えようと葉書をしたためたものであろう。家族のもとに帰ってくることを待つ心情とともに、出征兵士の動向(帰国など)についての情報を得るうえで、新聞やラジオは貴重な情報源であった。

2、葉書の宛先

四一三枚の葉書の宛先は南方に在る部隊、主に比島に在る兵士に宛てられている。「比島」と書かれているものが大半で、三三四枚に及んでいる。その後に続いて漢字一字もしくは二字で表した「兵団文字符」と連隊や大隊を表した番号「通称番号」が宛名として書かれている。「兵団文字符」と「通称番号」の二つをあわせて「通称号」というが、これは陸軍において部隊の名称を秘匿するために用いられたものである。葉書は「威」の通称号を用いて部隊に宛てた葉書が二三五枚と最も多く、これは南方軍総司令部を表す。²⁵⁾

また、宛名に「テ」や「ウ」という片仮名と数字が組み合わせて用いられている葉書も含まれており、これは海軍の郵便用区別符で、郵便を発送する際に用いられた。区別符は、最初に所在地区別符、次に部隊区別符の順でどの部隊に宛てたもののが表された。²⁶⁾『郵便物取扱二関スル例規』には、海軍の軍事郵便物の取り扱い方について記載があり、陸

上部隊宛の郵便物の宛名の記載は区別符を用いて所在地および海軍部隊名は表示しないことを明記している。²⁷⁾戦地から家族に宛てられた葉書には差出元が伏され、この区別符が用いられた。受け取った家族は、それがどこから差し出されたものなのか、どこの場所にいるのか知ることができなかった。

四一三枚の葉書のうち、この区別符が用いられた葉書、いわゆる海軍の部隊宛の葉書は四八枚あり、すべてが「テ」から始まっている。最も多い「テ二一」というのは、マニラを表している。²⁸⁾その後に続くのは「テ」や「ウ」「セ」といった部隊区分符である。あわせて、これらのすべての葉書には呉郵便局気付と冠している。戦時中郵便物はすべて交換局を経由することになっており、受け持つ交換局の名を表記することになっていたためである。²⁹⁾呉郵便局は比島をはじめ、東南アジアの地域を受け持つ交換局であった。

昭和二十年九月十九日の読売報知新聞は、「外地の海軍軍人に葉書が出せる地名の略号をも同時に発表」と見出しを付け、

外地第一線に在る海軍軍人軍属にどしどし葉書が出せることになった。従来外地に在る海軍軍人軍属に宛てた郵便物は所によつては送達困難な場所もあったが今後各方面とも一応送達の途が開けたので終戦後の留守宅の状況、米上陸後の生活等を案じて在る外地父兄、子弟に至急しらせるよう海軍では望んで在る。同時に海軍では今迄軍機になつてゐた地名の符号を左の通り発表したが宛名は従来どおりである、但し通信は葉書に限る、なほ今回明らかにされたものは地名だけであるが初めの片仮名が地名、後の片仮名が部隊名で例

へば横須賀郵便局気付ウノ二四ウノ九三とはウノ二四が父島、ウノ九三が根拠地である

と載せ、太平洋方面や千島・北海道方面、比島方面、沖縄方面、インド洋方面に配属された部隊の地名と区別符を掲載し、終戦から一か月を経て、各新聞に海外の海軍の軍人・軍属に家族から葉書を出そうという呼び掛けの記事を載せている。なお、朝日新聞でも九月二十一日に同様の内容が掲載されている。

これらの記事は、海軍の軍人・軍属への郵便物送付を海軍当局が望んでいるというもので、新聞記事によると、(1) 以前は送達困難な所もあったが、終戦でそれが解消されたこと、(2) 留守宅の様子を知らせて欲しいと軍が要望していたこと、(3) 軍事上の秘密であった部隊の符号の地名まで公開している点が注目できよう。海軍省の廃止は昭和二十年十一月三十日であり、九月にはこうした呼び掛けを海軍が行なっていたのである。

九月十九日付の新聞紙上で海軍の軍人・軍属に宛てた葉書を送るよう案内していたが、部隊が転属をするなど宛先が不明な場合も多かったためか、区別符を記入しなくても部隊名で届ける旨を改めて通達し、十月十二日の読売報知新聞にその記事が掲載された²²。

「固有名だけでも届けます 海軍の外地向け郵便物に便法」(見出し)
在外地所在の人員輸送用船便を利用する外地宛郵便物の送達は漸次活発化してゐるが海軍では今後地名符号及び部隊符号が判明しない場合は所在地及び部隊名はその固有名を記載してもよいことに改め

た、即ち次の各地に所在する軍官民宛郵便物の宛名は頭書の郵便局気付とし、例へば横須賀郵便局気付〇〇島〇〇会社何某殿とする

◇横須賀郵便局気付とするもの マーシャル方面(ウオツゼ、マロエラツプ、ミレ、ヤルトト、エンダビー、ナウル、オーシヤン 東カロリン方面(トラツク、ボナペ、クサイ、モートロツク) 西カロリン方面(パラオ、ヤツプ) マリアナ、小笠原諸島、ニューギニア方面、ラバウル方面 ◇呉郵便局気付 比島方面 ◇門司郵便局気付 南鮮方面 右以外の各地については追つて決められる

比島方面を呉郵便局気付とするのは、戦時中比島の郵便交換局が呉郵便局であつたため、引き続き取り扱っていたものと思われる。

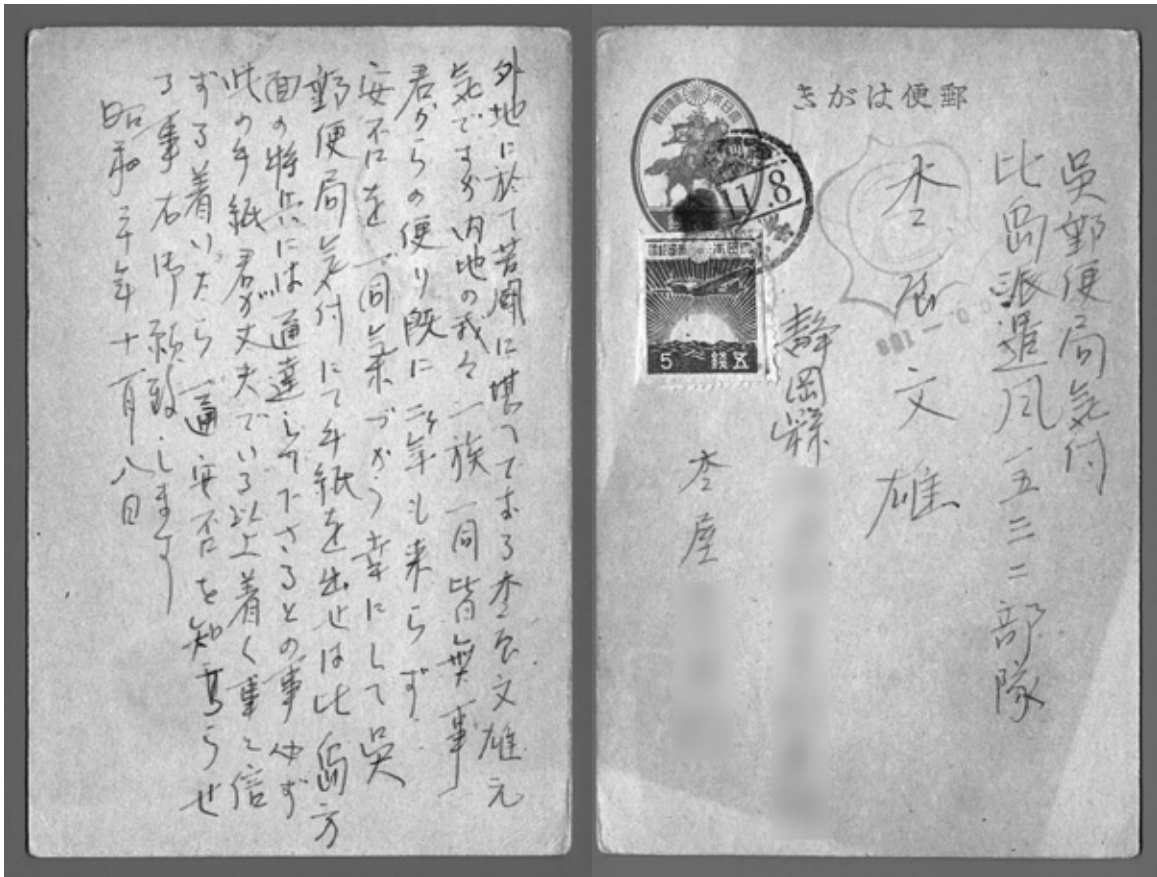
この新聞記事は兵士の消息が分からない人たちの案内となつたようである。次のように記す葉書もある。

呉郵便局気付 比島派遣 風一五三二部隊 柵屋文雄

差出人・静岡県 柵屋 消印・昭和二十年十一月八日(家族)

「外地に於て苦闘に堪へておる柵屋文雄元氣ですか 内地の我々一族一同皆無事 君からの便り既に二ヶ年も来らず 安否を一同気づかう 幸にして呉郵便局気付にて手紙を出せば比島方面の將兵には通達して下さるとの事 必ず此の手紙君が丈夫でいる以上着く事と信ずる 着いたら一通安否を知らせる事 右御願致します 昭和二十年十一月八日」(資料7)

陸軍では、葉書の送付を勧めるなどの記事を掲載した形跡はないが、



資料7 呉郵便局気付と書かれた葉書

十月二十一日に至り、ようやく部隊の通称号と部隊の駐屯地が分かる記事を朝日新聞に掲載している⁽³⁴⁾。

「この部隊はここにゐる」(見出し)

わが父、わが夫、わが子はいまどこの地で内地への復員を待ち詫びてゐるだらうか、「威部隊」とか「宮部隊」とか、部隊の通称だけは家族も知らされてゐるが、それらが何方面軍の何師団であるかはもちろん、どこの郷土部隊がいま何処の地に復員を待つてゐるかも知らないのである、それはいままで防諜上、作戦上陸軍の部隊号もその駐屯地も作戦地も絶対極秘にされてゐたものだが終戦のいま、もはやその必要もなくなつたので本社では陸軍当局にその調査を請うて、次の如く航空、船舶、鉄道部隊を除く各部隊の部隊号、通称号、司令部の所在地等を公にすることを得た

そして十月二十三日に書かれた葉書には、

比島派遣 威第一七六〇二部隊 八重樫隊 加藤伊助様

差出人・神奈川県 加藤 消印・昭和二十年十月二十三日(家族)

「(1) 今日新聞で威といふ記号の部隊はサイゴンだと知りました。比島派遣故まさか仏印とは思ひませんでした。レイテ島セブ島ルソン島上陸ときく度に、殊にレイテ島上陸の時には貴君に関する一切をあきらめ手紙を出すこともやめましたので 今日西貢と聞いて驚きました、でもいまは安南人のことで大変ではないかと心配です。兄さんは仏印の河内といふ所です。人によると比島の附近の島では

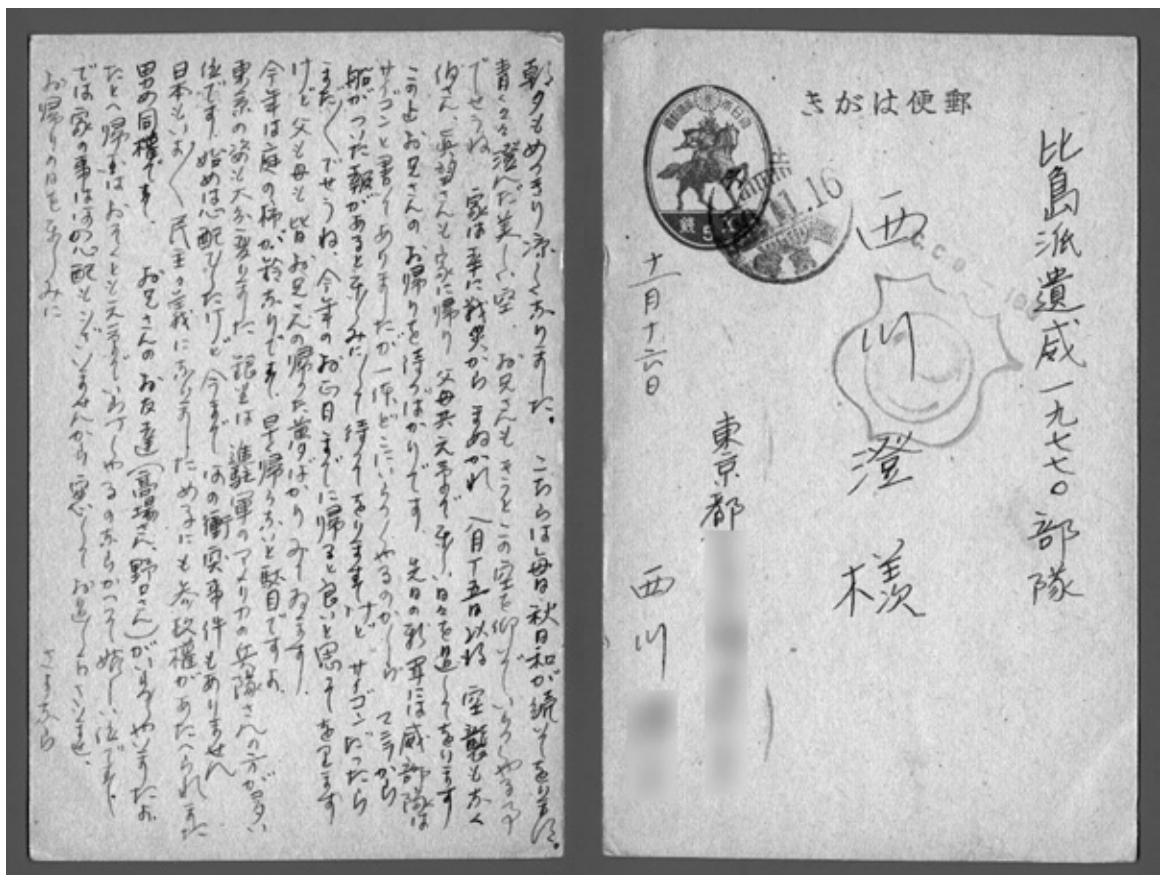
ないかといはれます。いづれにしても早くお帰りをお待ちしてゐます。十月十八日朝早く海老名からお婆さん、トシちゃん、サヨちゃんの三人がまいりました。二十日がこちらの運動会ですので、それまでとまり二十一日に海老名へ帰りました。邦彦、美智子、サヨちゃん、とても良く三人で遊びます。近所の人がサヨちゃん和美智子と、とても良く似てゐると申してゐます。美智子をふとんの中に入れてサヨちゃん和邦彦が持手です。軍かんにつたと大きはぎです。運動会には家中で、お昼にお萩をつくつて持つてきました。お婆さんも来賓席でうれしきうです。美智子たちは朝礼台に(20:10:23)

とあり、軍の機密事項だった記号が公開されたことで、出征した家族の居所が明らかになり、郵便を出せる環境が整つてきたといえよう。

次の葉書も同様に部隊の配属場所について新聞で知つたことを伝えている。

比島派遣 威一九七七〇部隊 西川澄様

差出人・東京都 西川 消印：昭和二十年十一月十六日(妹から兄へ)
 「朝夕もめつきり涼しくなりました。こちらは毎日秋日和が続いてをります。青く々々澄んだ美しい空、お兄さんもきつとこの空を仰いでいらつしやる事でせうね。家は幸に戦災からまぬかれ 八月十五日以後 空襲もなく伯さん、眞望さんも家に帰り 父母共元気で楽しい日々を過してをります。この上お兄さんのお帰りを待つばかりです、先日の新聞には威部隊はサイゴンと書いてありましたが、一体どこにいらつしやるのかしら マニラから船がついた報があると



資料8 妹から兄へ宛てたと思われる葉書。「威」部隊の配属地について書かれている。

楽しみにして待つてをりますけど サイゴンだつたらまだくでせうね、今年のお正月までに帰ると良いと思つてをりますけど 父も母も皆お兄さんの帰つた夢ばかりみてゐます。今年は庭の柿が鈴なりです。早く帰らないと駄目ですよ。東京の姿も大分変りました銀坐は進駐軍のアメリカの兵隊さんの方が多いい位です。始めは心配でしたけど 今まで何の衝突事件もありません 日本もいよく国民主々義になりました 女子にも参政権があたへられました 男女同権です。お兄さんのお友達（高場さん、野口さん）がいらつしやいましたよ。たとへ帰国はおそくとも元気でいらつしやるのならかへつて嬉しい位です では家の事は何の心配もございせんから安心してお過し下さいませ。お帰りの日を楽しみに さよなら（十一月十六日）〔資料8〕

兄がサイゴンに在ることを知り、遠い異国の地に想いを馳せ、一日も早い復員を願う家族の心情が読み取れる。

大半が比島の部隊の兵士に宛てられた葉書であるのに対し、例外的な葉書も含まれている。そのひとつが、南方にあつた日本企業の支社にいる家族に宛てられたものである。

門司郵便局気付 比島マニラ市石原産業 東條卓三様

差出人…佐賀県 東條 消印…昭和二十年十月三十日（妻から夫へ）

「第一信 長らく御無沙汰を致しました その後御障りも無く御すごいで御座るませうか 昨秋電報を頂き 御無事を喜びましてより一ヶ年何の御たよりも頂けませんので 如何遊ばしてかと日夜御案

じ申上げて居ります この七月五日徳島空襲にて 志田家と共に罹災致し無一物となり 当地の兄の家へ参りました 何から何まで、兄の世話になり 幼き頃暮らした家に山口の姉家族と番人家族と三家族同居致し居ります。貴方様の服、大学時代のノート 写真等その他貴重品を全部失つてしまひ 何と御わび申上げたよろしいかと 今から心をいためて居ります。只親子五人怪我一つせず無事避難出来ました事だけを倅と存じ居ります。御無事に御帰り遊ばす日の一日も早い様 念じ上げて居ります。（十月二十七日）」

この家族は、遠い地に夫と離れて生活するなかで、葉書だけが直接語りかけることができる手段でありながら、夫からは一年という長い期間、音沙汰がなく、不安な心情がうかがえる。また、当時、写真は貴重品であり、その他の品も徳島空襲によって、失ってしまった絶望感を伝え、詫びている。

宛先の「石原産業」は、「南方諸国の鉄鉱石採掘を中心とした戦前の代表的な南方進出企業グループである。（中略）マニラ石原産業会社（資本金百萬比）はマニラに本社を置き、フィリピンのルソン島などで鉄鋼を採掘する会社である。戦時中は軍の事業委託による資源開発もあり、南方での資源開発コングロマリットといわれるような新興財閥として発展していった」³⁵会社である。

資源が乏しい小さな島国である日本は、南方での資源獲得を進めていた。そのため多くの民間人が軍部に徴用されていたのであつた。石原産業株式会社の社史によると、南方資源開発のため、開戦前の時期に軍部より同社社員たちが徴用されたと書かれている。「昭和十六年）九月に

入って、軍部から南方に経験の深いわが社に対して、ひそかに南方事情の照会があり、また南方に経験のある従業員を申告せよとの内命があった。こんな動きから、軍部に対米英戦闘開始の決意があるように推測されたおりから、大阪本社勤務の鈴木龍男君に徴用令が下り、次いで十一月十七日には、左記二十八名に対し、同様令書が送達され⁽³⁶⁾とある。この二十八名は陸軍に徴用されており、宛名の東條卓三氏もその中なかに含まれていた。また、この社史には、その後の東條氏の行動が記されており、「昭和二十年の一月五日には、マニラ周辺の形勢が急迫したので、すぐに撤退開始の命があり、(中略)東條卓三君を中心とするE班は海軍航空廠の囑託としてバヨンボンへ⁽³⁷⁾向かったとある。バヨンボンを目指した各班であるが、原住民から日本降伏の報に触れた後、米軍の指示に従ってマニラ地区の抑留所に入り、帰国の日を待ったという。

兵士として戦地へ赴く人だけでなく、戦闘とは別の形で戦争に協力させられ、民間の女性も含まれていた。

比島派遣 鳳第一五三二部隊 武田すみ枝殿

差出人・静岡県 後藤 消印・昭和二十年十一月十六日(知人)

「昭和十九年六月二十九日附の)君からなつかしい便りを一通貰ったきり、情勢は急角度に悪化して、砲煙は比島のレイテにそしてリンガエンに及び、遂にマニラも陥ちるに至りました。内地にゐる小生は毎日、紙上の戦況報告を見つめ、君の安否を気づかつてゐた。君をマニラにやつたことをほんたうに悔いてゐる。内地も全く変り果て、了つた。東京、大阪云ふに及ばず、都市の殆んどが焦土と化した。君が若し生きて故郷の地を踏んだならどんなにか驚き且悲しむ事だ

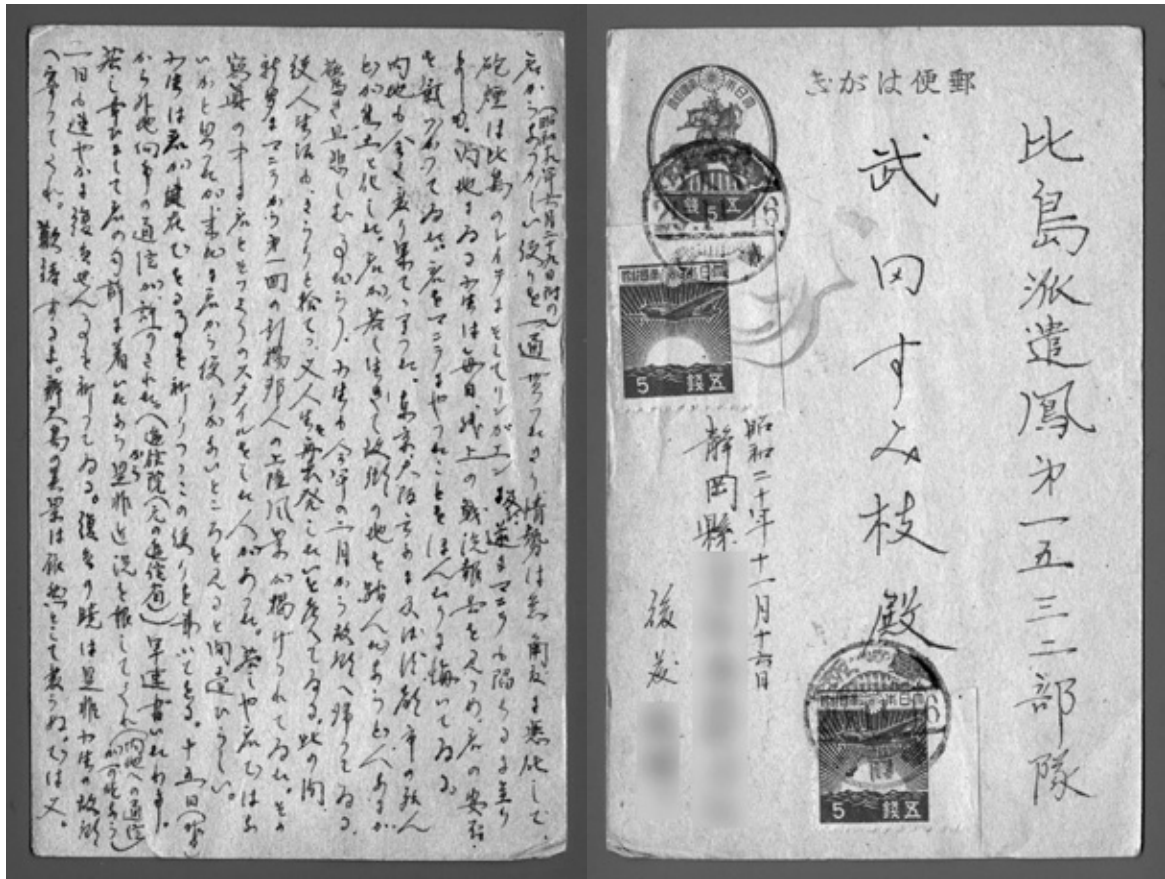
ろう、小生も今年の二月から故郷へ帰つてゐる。役人生活も、さらりと捨て、又人生を再出発したいと考へてゐる。此の間、新聞にマニラから第一回の引揚邦人の上陸風景が掲げられてゐた。その写真の中に君とそつくりのスタイルをした人があつた。若しや君ではないかと思つたが、未だに君から便りがないところを見ると間違ひらしい。小生は君が健在でゐる事を祈りつゝこの便りを書いてゐる。十五日(昨日)から外地向けの通信が許可された。(通信院(元の通信省)から)早速書いたわけ。若し幸ひにして君の手許に着いたならば是非近況を報してくれ(内地への通信が可能なら)一日も速やかに復員せん事を祈つてゐる。復員の暁は是非小生の故郷へ寄つてくれ。歓待するよ。弁天島の美景は依然として変らぬ。では又。」〔資料9〕

これは、「すみ枝」という女性と思われる人に宛てた葉書である。部隊の通称号⁽³⁸⁾が書かれていることから「すみ枝」は戦地で救護員などしていたと推測される。

葉書に書かれた部隊「鳳第一五三二部隊」については、『部隊通称号索引簿』⁽³⁹⁾等では確認できないが、「鳳」という兵団文字符をもつ部隊は、第一〇四師団⁽⁴⁰⁾で南支に派遣され、終戦を迎えた部隊となっている。しかし、宛名には「比島派遣」とあり、文中にも「君をマニラにやつたことをほんたうに悔いてゐる」とあることから、「すみ枝」がフィリピンにいたことは確かなのだろう。

3、届かなかつた葉書

四一三枚の葉書は、両親や妻、子どもたちから、兄弟姉妹から、恋人



資料9 女性の宛名が書かれた葉書

と思われる人から、職場の同僚からなど、さまざまな間柄の人が差し出している。それは、大人から幼い子どもまで、幅広い年代の人びとが差し出した葉書という点においても貴重な資料といえるであろう。

なかには、絵葉書で送られたものが四〇枚みられる。絵柄は慰問袋（口絵5）や小学生が鋏を持って増産に精を出す様子を描いた葉書（口絵6）など、当時の様子を伝えている。また、中原淳一（画家）が描いた女性画や日本の象徴である富士山、故郷をしのぶ風景は人気が高かったようで、遠い異国で帰国を待つ兵士たちにとっては励みになるはずだった。

葉書には終戦を迎えての変化、進駐軍のいる慣れない生活や今後の生活に対する不安、ささいな日常の出来事から、街や人びとの心境の変化などが綴られている。親しい間柄で交わされているからこそ本心を伝えており、当時の生活を知る貴重な記録でもある。

葉書がアメリカに渡った経緯については明らかではない。現段階では、全国各地から葉書が投函され、四か所の検閲局での検閲を経た後、比島に送られるために一か所に集められたと推測できる。その後、実際に海を渡って比島に届けられたのちアメリカに渡ったのか、送られず日本国内で留まっていたのかは定かではない。復員郵便は、篠原宏氏によると、「郵便物は東京中央、博多の各郵便局に集中され、復員、引揚げのために出向する船舶に託して、旧日本部隊に送られた」とあるが、船に積まれ、比島に送られたのか、戦後の比島の混乱状況を考えると、この葉書群が送られず日本に留まった可能性も否定できない。もちろん比島に送られた可能性もあるが、いずれにしても本人の手に届くことはなかった。

おわりに

軍事郵便というと、兵士が家族や知人らに宛てた郵便が扱われることが多い。ラファイエット大学スキルマン図書館に保管されている四〇〇枚余りの葉書には、家族や知人から戦地（大部分は比島）にいる兵士に宛てられたもので、その多くは戦後間もない時期（昭和二十一年一月以前）の郵便であったことに特徴がある。

終戦とともに、家族らは兵士の安否を気遣う葉書を出すのが、戦後の混乱した状況では郵便事情も悪く、投函したとしても兵士の手元に届けられる希望は薄かった。次第に郵便事情が改善されるなかで、二十年十一月十六日の新聞報道とラジオ放送は、戦地の兵士に葉書を送ることができるようになったことを伝えた。四〇〇枚余りの葉書の多くは、十一月十六日以降に書かれたものであったことをみても、同日の報道が大きな画期になったことは否定できないであろう。それだけ、家族や知人は出征兵士の安否を確認したい、連絡を取りたい、そのための情報を得たい想いが強かったことを示すものであった。

それらの葉書は進駐軍による検閲を受ける必要があり、検閲所も地域が決められていた。また、検閲印の押印位置は各検閲所によって異なっており、押印のされ方によって検閲所も分かるとされてきた。ラファイエット大学の葉書を検討したところ、押印のされ方によって検閲を分けることはできないだろうと提示したが、この点については更に検討が必要と考えている。

本稿では、四〇〇枚余りの葉書のなかから関連する内容のみを取り上

げた。妻から夫に宛てた葉書では、夫の帰りを待ち焦がれる心情が綴られており、妻からのラブレターといっても過言ではない内容もみられる。近況を伝えつつ、安否を案じ、夫からの返信を待ち望む。それは妻や子ども、家族の無事や生存を夫に伝えるとともに、夫から直接の連絡を待つ、安否を確認することの数少ない手段であり、互いのつながりを確認できる可能性をもった方法であった。

これらの葉書で伝えている内容（伝えようとしている内容）については、稿を改めて検討したい。

〈注〉

- (1) <<https://dss.lafayette.edu/collections/east-asia-image-collection/>>
- (2) “Gerald & Rella Warner Japan Slide Collection” については、平成二十六年度入手し、映像・音響室で公開している。また、平成二十九年度には「カラー写真が伝える復興・発展のきざし——占領下の日本——」と題して写真展示を行った。
- (3) <<https://dss.lafayette.edu/collections/east-asia-image-collection/>>で一部紹介している。
- (4) 引用した史料については、使用漢字は常用漢字で統一し、歴史的仮名遣いは原文のままとした。葉書の翻刻にあたっては、原則として原文に忠実とし、当て字、誤字、誤記と思われるものについてもそのままとした。引用した葉書については、差出県と苗字までの表記とする。
- (5) 古橋研一『調布地域の空襲と敗戦(2) (敗戦・占領編)』みんな新聞社、平成二十四年六月、二二三頁。
- (6) 外務省特別資料部編『日本占領及び管理重要文書集 第2巻 政治、軍事、文化篇』東洋経済新報社、昭和二十四年三月、一八五頁。この和訳が裏田稔『占領軍の郵便検閲と郵趣 Postal Censorship in Japan, 1945-49』日本郵趣出版、

昭和五十七年五月、一八頁に「すべての郵便物は太平洋民間検閲部が適当と認められた範囲まで検閲を必要とし、検閲担当の通信連絡将校によって指示があった場合には、検閲のため郵便物を提出せねばならない」とある。

(7) 「昭和二十年十月閣令第四十三号」郵政省『統通信事業史 第三卷 郵便』前島会、昭和三十五年十二月、二二九頁。

(8) 昭和二十年十月十一日付『朝日新聞』「郵便等に検閲制 連合軍の命で閣令公布」。

(9) 裏田稔『占領軍の郵便検閲と郵趣 Postal Censorship in Japan, 1945-49』日本郵趣出版、昭和五十七年五月、四一頁。

(10) 前掲注(9)に同、二三頁。
森勝太郎「第2次大戦後の占領軍の郵便——主に占領軍の郵便検閲について——」(水原明窓編『日本切手百科事典 Encyclopedia Japanese Philately』日本郵趣協会、昭和四十九年六月)七五頁。

(12) 平成七年七月十九日付『信濃毎日新聞』「占領下の空白110 郵便検閲②」。

(13) 篠原宏『大日本帝国郵便始末 Japanese Postal History, 1941-47』日本郵趣出版、昭和五十五年三月、一二二頁。

(14) 前掲注(11)に同、七六頁。

(15) 前掲注(11)に同、七七頁。

(16) 前掲注(11)に同、七六頁。

(17) 前掲注(11)に同、七六頁、図6。

(18) 前掲注(11)に同、七七頁。

(19) 情報局編「週報 四月四日号四三九・四四〇合併号」『史料週報 第三二卷』大空社、昭和六十三年四月、一六頁、昭和二十年四月一日改正の郵便料金表が掲載されている。これによると、国内郵便・占領地宛郵便・軍事郵便・日満郵便・日華郵便の通常郵便料、第二種通常葉書は五銭とある。昭和二十一年七月二十五日の料金改定で十五銭となった。

(20) 右同、一六頁。

(21) 郵政省編『統通信事業史 第三卷 郵便』前島会、昭和三十五年十二月、三一頁。

(22) 昭和二十年十一月十六日付『朝日新聞』「在外邦人への便り」。

(23) 昭和二十年十一月十六日付『読売報知』「送ろう懐かしい故国の便り 外地、南方向け郵便物許可」。

(24) 昭和二十年十一月十六日付『毎日新聞』「在外將兵邦人へ便りが出来ます」。

(25) 松原慶治編『終戦時帝国陸軍全現役將校職務名鑑』戦誌刊行会、昭和六十年八月、三三頁。

(26) 『郵便物取扱二関スル例規 附』有線電報取扱二関スル件 海軍公報(部内限)別冊』昭和十九年六月、二頁。

(27) 前掲注(26)に同、二頁。

(28) 「附録」所在地別符及部隊区別符表(『郵便物取扱二関スル例規 附』有線電報取扱二関スル件 海軍公報(部内限)別冊』昭和十九年六月)。

(29) 前掲注(26)に同、一頁。

(30) 昭和二十年九月十九日付『読売報知』「外地の海軍軍人に葉書が出せる 地名の略号をも同時に発表」。

(31) 昭和二十年九月二十一日付『朝日新聞』「外地の海軍へ葉書 知らせよう留守宅の動静」。

(32) 昭和二十年十月十二日付『読売報知』「固有名だけでも届けます 海軍の外地向け郵便物に便法」。

(33) 前掲注(26)に同、一頁。

(34) 昭和二十年十月二十一日付『朝日新聞』「この部隊はこゝにゐる」。

(35) 丹野勲「戦前日本企業の南方への投資——石原産業を事例として——」(『国際経営フォーラム』編集委員会編『国際経営フォーラム(25)』神奈川大学国際経営研究所、平成二十六年)四三頁。

- (36) 石原産業株式会社社史編纂委員会編『創業三十五年を回顧して』石原産業、昭和三十一年十月、一九〇頁。
- (37) 右同、二四六頁。
- (38) 日本赤十字社編『人道―その歩み 日本赤十字社百年史』日本赤十字社、昭和五十四年三月、一七一頁。救護員は、陸海軍の衛生勤務を援助することを目的として、昭和十二年の日華事変から昭和二十年八月の終戦までの間だけで、九百五十五個の救護班が編成された。その編成に属した救護員延べ三万五七八五人が、国内の病院だけでなく、満州や中国、東南アジア、南太平洋の地域と拡大した戦線に伴って各地へ派遣された。
- (39) 『部隊通称号索引簿』復員局留守業務部、昭和二十七年三月。
- (40) 前掲注(25)に同、三九頁。
- (41) 前掲注(13)に同、一四一頁。

著者プロフィール

折原里枝（おりはら・りえ） 昭和五十四年（一九七九）埼玉県生まれ。
立正大学文学部国文学科卒業。
現在、昭和館図書情報部勤務。